

英国におけるフットボールの歴史に関する研究 (11)

——ラグビーとアソシエーション——

秦 修 司

A Study on History of Football in Britain(XI)

—Rugby and Association—

Shuji HATA

緒 言

パブリックスクールにおけるゲームの礼賛がその時代の他の出来事からかけ離れて発展したのではないのはもちろんである。それは広範な動きの一部であり、つまり、19世紀前半に英国において始まりそして西欧諸国全体に拡がっていったゲームへの関心のめざめであった。ゲーム礼賛はある意味ではその時代の兆候にしか過ぎなかったが、出来事の動向に重要な影響を及ぼしたし、事実ある1つの段階において1850年以後の出来事の動向を決定づけた。パブリックスクールの卒業生はゲームに熱中する雰囲気教育されたが、当然のことながらその熱意を彼等とともに世間社会に持ち込み、パブリックスクールの教育を受けたことのない人々を感化した。仮にラグビー校やアーノルド(Thomas Arnold)の存在がなかったにしても、多分にフットボールは英国の主要な国民的スポーツになっていたに違いない。というのはフットボールのゲームは英国において数世紀もの間、国民的スポーツであったからである。しかしパブリックスクールの生徒の影響があつてフットボールは以前より重要視されたのである。そして2つに分裂してラグビーとアソシエーションのフットボールになることはなかった。何故なら、パブリックスクールの卒業生の相対する2つのグループ間の争いから2つに分裂したからである。そこでそれについての経過をたどってみることが必要となってくるのである。

本 論

ラグビー校のフットボールの様式はTom Brown's Schooldays (1857) において網羅された時期、1840年代には明確な形をとっていた。現代の意味での競技規則はまったくなく、むしろゲームは慣例によって治められており競技規則は伝統的なものであり成文化されていなかったのは確かである。しかし、Tom Brown's Schooldaysの作者であるトーマスヒューズ(Thomas Hughes)がビッグサイドのキャプテンであった1846年に初めて競技規則が成文化された。1846年9月7日、レバーオブビッグサイド(Levee of Bigside)によって裁可されたThe Laws of Football as played at Rugby Schoolは現代の競技規則という意味では総括的ではないが、その序文から明らかなようにフットボールにおいてある問題が生じた時のその決定法であった。

本競技規則はラグビアン¹⁾にはあまりにもよく知られどんな説明も要しないゲームの規則のすべてを包含するものとしてよりはむしろ、フットボールにおける問題のその解決法である。²⁾

事実、それら競技規則はラグビー校において生じた特殊な諸問題を取り扱う意図のものであった。そして、それらが他の学校に輸出されるその可能性についてはまったく意図しなかったのは確かである。しかし他の学校にすぐに輸出

され、その理由でこれら競技規則の公表がフットボールの歴史において重要な段階を特徴づけるのである。競技規則について精査するのは本稿の目的ではないが、それらはゲームの一般的特徴について多くを表わしており、しかも的を得ており興味深い。ハッキングはかかとでなされるとか膝の上の部位に対してなされるということとはなかったが、攻撃、防御その両方ともに許されたプレーの特徴であった。ハッキングについては激しい論争の問題になりフットボールアソシエーションの設立につながる原因の1つであった。ボールを保持しているプレーヤーを抱きかかえてよかったが、それは片手のみ許された。相手を抱きかかえながら同時に脛を蹴るのは許されなかった。ランニングイン³⁾が初めて合法的になりゲームの必要不可欠な要素になった。しかし、パスは禁止された。数世紀の間パスするのが様々な地方でのハンドリングゲームの特徴であったのでパスを禁止すべき理由は理解するのが難しい。プレーヤーがボールを遠ざけたり、クロスバーの上に立ってゴールを阻止するのを禁止する規則があったのは奇妙である。しかしその必要性が明確に感じられたに違いなく、それらを生じさせた事例について知るのは興味深いことであろう。長時間に及んで競技する伝統が残ったがこれらの規則によると、5日間で（もしくは、如何なるゴールもなされなかったら3日間で）勝敗が決しなければその試合は引き分けとなった。そのような試合は、多分にめったに生じることはなかったが、その類のことが生じた場合、それは極めて忍耐力が必要であったに違いない。ラグビアンは1846年、みずからのためにゲームの競技規則を成文化したが、その事実はゲームを他の学校に輸出されるのを極めて容易にした。これは1850年代そして1860年代に起こり始めた。それはパブリックスクールが大きな拡がりを見せた時代でもあった。新しいそして裕福な中産階級の急速な増大のためにパブリックスクールにラグビー校の教育方針に沿った教育の多大の要求が生じ

た。アッピンガム校やシェルボーン校のように形を変えた古いグラマースクールもあったし、チェルテンハム校(1841)、マールバラ校(1843)、ロッサール校(1844)、ウエリントン校(1853)、クリフトン校(1862)そしてヘイリーバーク校(1862)などのようにラグビー校をイメージして設立された新しい学校もあったが、それらはすべてラグビー校のフットボールの競技様式を採り入れた。しかし最初は局所的な差異をもってフットボールが行われていた。というのは1846年のラグビー校の競技規則はすべてを網羅していた訳ではなかったので、多分に各々の学校には独自の進取性をとり入れる余地があったからである。最初はゲームを標準化する機会を与える学校間の対抗試合もなかった。この方向で2、3の試みがなされたが⁴⁾、流血や悪感情が極めて生じたのでイングランドにおいて対抗試合が二度と行われることはなかった。再び対抗試合が始まったのは1890年代になってからであった。

同様のことがスコットランドにおいても生起していた。ラグビー校のフットボールのゲームは1851年にエジンバラアカデミィに導入されたと言われているが、そのゲームはすぐに普及し、スコットランドの他のパブリックスクールに急速に普及していった。⁵⁾

彼等はイングランドの生徒よりいち早くラグビー校のフットボールのゲームを好んだ。そして活力あふれたスキルフルなプレーが最初から彼等のゲームの特徴になった。ロレット校のアマンド(H.H.Almond)の影響のもとに学校間の対抗試合がイングランドよりはやく始まった。ラグビー校のフットボールの様式を採り入れたスコットランドの学校、つまりマーチストン校、フェテス校、そしてロレット校などは1860年代まで互いに友好的に競技していた。彼等も又、最初は局所的な特異性を持っていた。特にマーチストン校は独自の線でフットボールのゲームを発展させたが、結局はエジンバラアカデミィと妥協することによって試合を可能にし

た。ゲームを統一化する目的の委員会がエジンバラの諸々の学校から設置された。その結果、The Green Book として知られる競技規則が権威あるものとしてスコットランドのすべての学校に採り入れられた。⁶⁾

ラグビー校の類のフットボールは1860年までに首尾よくパブリックスクールにおいては是認されたゲームになっていった。すべてのパブリックスクールが同調してラグビー校の類のフットボールを行ったならば、フットボールの歴史は変わったかもしれない。しかし、一握りの誇り高く歴史あるパブリックスクールがラグビー校の影響に抵抗し、彼等が数世紀の間独自に発展させてきた伝統的な形態を持つゲームを残した。イートン校は2つの独特の類のゲームであるウォールゲームとフィールドゲームを行った。これらのゲームは独特で独創的な特徴を残しているが、その両方ともがブリーとして知られるスクラメージの形態をとどめていることにおいて、究極的にはラグビー校のゲームと同種であるとみられるかもしれない。ハーロー校やウインチェスター校も同様に彼等が慣れ親しんできた特別の様式のゲームを放棄することはなかった。ハーロー校、ウインチェスター校のゲームの両方において、例えばトム ブラウンの時代のラグビー校の場合のようにプレーヤーはボールをキャッチするのが許されているがそれはフリーキックするためにボールをキャッチしなければならなかった。イートン校、ハーロー校そしてウインチェスター校のフットボールのゲームのすべては、その歴史においてこの時期にあり、ハンドリングゲームというよりはむしろキッキングゲームを残してきた。

それら独立主義をとった学校がフットボールにおける将来の重要な出来事の経過に重要な影響を及ぼすことがなかったのは当然である。しかし、チャーターハウス校とウエストミンスター校はノンハンドリングのゲームを好み、他の大多数の学校に同調しなかっただけでなく彼等独自の限られた世界に閉じこもることはなかつ

た。両校のフットボールとも本来的にはあらゆる要素においてラグビー校のフットボールのように激しい形態をとっていた。しかし、両校とも比較的大きなオープンスペースで穏やかな類のゲームを発展させたが、そこではハンドリングは許されなかった。急速に高まってくるラグビー校の卒業生の影響に直面し、彼等独自のものとして採り入れたのはこの類のノンハンドリングのゲームであった。チャーターハウス校とウエストミンスター校がこの時にラグビー校のゲームに対する二者択一として独自のゲームを発展させるのを選んだ事実はそれに特別の重要性を与え多大の効果があつた。というのはフットボールの問題についての考えに相反する2つの派があつたからである。

この時期運動競技の復興の影響の1つは大学におけるフットボールへの関心の復活であつた。フットボールのゲームは16世紀そして17世紀にオックスフォード大学とケンブリッジ大学において人気を得ていた。しかし18世紀にはその反動をもたらし、フットボールは注目に値しない俗悪なスポーツと見られるようになり、19世紀に入るとフットボールのゲームは少ししか知られていなかった。しかし、ラグビー校の卒業生や他のラグビー校のプレーの様式を採り入れた学校の卒業生が大学の学部学生となって彼等とともに大学にフットボールのゲームを持ち込んだ。

ラグビー校のゲームは1839年に最初にケンブリッジ大学に達したと言われている。ケンブリッジ大学においてラグビー校のフットボールのゲームはクリケットや漕艇のような男性的な運動に比較するまでもなくそれを生徒のゲームと看做していたラグビー校卒業生以外のほとんどにあまり重要視されなかった。しかしラグビー校の影響が新しいパブリックスクールの間に拡がり、その在学中ハンドリングゲームを行った多くがケンブリッジ大学において増大していくにつれラグビー校のゲームは定着していった。しかし、ラグビー校のゲームは少数にしか行わ

れなかった。1845年までに様々異った学校の卒業生によって行われている若干異った類のゲームの成文化が必要になり、その年ケンブリッジ大学において会合が催され、競技規則が作成されたが、それは1846年に公表されたラグビー校の競技規則に多くの示唆を受けたのは確かである。

オックスフォード大学でのラグビー校のフットボールのゲームの初期の歴史については明瞭ではないが、そのゲームをラグビー校の卒業生がオックスフォード大学に導入したのは疑いなく、1830年代にそれがケンブリッジ大学に達したと同じ時に導入されたに違いない。しかも不思議なことであるが、Tom Brown's School-days の続編である Tom Brown At Oxford (1861) において、ラグビー校のフットボールのゲームについての記述がまったくなく、その中では漕艇がオックスフォード大学の第1のスポーツ活動として表わされている。このことは、大学においてはフットボールのゲームはまだ希有であり、ほとんどのオックスフォード大学の学生にあまり評価されなかったもので、作者であるトーマスヒューズのようなフットボール熱狂者でさえフットボールのゲームを多分にパブリックスクールの生徒のゲームと看做していたのであろうと推測する以外は説明が難しい。

一方、オックスフォード大学やケンブリッジ大学にチャーターハウス校やウエストミンスター校の数多くの卒業生がいたのはもちろんであるが、彼等のある者はノンハンドリング、つまりドリブリングゲームの信奉者であった。この類のフットボールがいつ導入されたかは不明であるが1855年に試合が行われたのは知られている。これの効果の1つは、チャーターハウス校やウエストミンスター校ばかりでなくより排他的なイートン校そしてウインチェスター校からさえドリブリングゲームの類のフットボールを好んだ学校の卒業生をまとめたことであった。このようにして、大学においてハンドリングとドリブリングのフットボールの2つの派が

生じた。しかし各々は自己独自のゲームの形態が優れているとし、どちらとも2つの別々のゲームと考えることはなかった。どのようにしてフットボールのゲームを行うかの意見の相違があったかもしれないが、これらの相違はラグビー校のゲームを行っていたグループの中ですでになされていたように交渉によって解決されることと期待することができた。

この段階は1860年代、ケンブリッジ大学において達せられた。1860年に始まる10年間はフットボールの歴史全体の中で最も重要な時期となった。

その問題はカートライト (J.D.Cartwright) による新聞の連載記事の結果として1863年に頂点に達したが、彼はその中で統一された競技規則の作成のために様々なパブリックスクールや大学の代表で会合を持つことを提唱した。その当時の人々の多くは競技規則の成文化の必要性に気付いていたのは明らかである。チャーターハウス校は1861年に初めてフットボールのゲームの成文化を行った。⁷⁾

アッピンガム校のスリング (J.G.Thring) は1862年6月に The Simplest Game という表題の競技規則を公表したが、それはフットボールの2つの主要な様式の特徴を組合せており、事実、1880年代までアッピンガム校で用いられた。カートライトの記事はより広範な関心を生起させた。最初の効果は6校、つまりシュリューズベリー校、イートン校、ラグビー校、ハーロー校、マールバラ校そしてウエストミンスター校の代表がその問題を考えるために集ったケンブリッジ大学において見られた。その会合の構成が重要である。これら6校のうちイートン校、ハーロー校そしてウエストミンスターの3校がドリブリングゲームを支持した。1校、つまりシュリューズベリー校の態度は疑わしい。というのはシュリューズベリー校では当時、ラグビー校のパターンのゲームが行われ、そして、ケンブリッジ大学においてラグビー校の卒業生と試合を行っているが、後にドリブリング

ゲームの陣営に加わったからである。マールバラ校だけが唯一ラグビー校のフットボールの忠実な支持者であった。論議の結果、その決定はイートン校派が乱暴だけでなく低俗と看做したハッキング、トリッピング、そしてボールを持って走ることのようなラグビー校のフットボールのゲームの最も際立った特徴のいくつかを禁止することであった。これによりラグビー校派は他校との交渉を断ち孤立してラグビー校独自のゲームを継続した。これがドリブリングゲームとハンドリングゲームの2つの派が和解できないかもしれないことを示唆した最初のものであった。

ここでフットボールのゲームの歴史のこの段階において多くの論争を引き起こしたトリッピングやハッキングの問題についてより詳細に考えてみるのが適切である。トリッピングやハッキングの行為は単なる技術上の規則違反としてでなくアンフェアで軽べつすべきものとして考えられている。公式なゲームにおいては相手をつまづかせたり、相手の脛を蹴ったりするプレーヤーはレフリーによってペナライズされ、アソシエーションフットボールにおいては、観衆の「不法だぞ」もしくは「汚いぞ」の叫びで非難される。しかし祖先はまったく別のことを考えた。トリッピング又はハッキングオーバーは——その2つは1850年ごろまでは見分けがつかなかった。——16世紀そして17世紀にはボールを持っているプレーヤーを阻止する認められた方法であった。そしてラグビー校のフットボールがその形を整え始めるまでトリッピングとハッキングは継続したに違いない。1846年のラグビー校の競技規則にハッキングについて次の言及がある。

第13条、脛を蹴ると同時に掴むことは正当でない。

第14条 かかとで脛を蹴ってはならない。又、膝より上を蹴ってはならない。

第22条 他のプレーヤーに対抗になるプレーヤーは一方の手をのみ掴んでよい。しかし、

もしボールをキックしたりタッチラインを越えて行こうと企てるならば、相手に対し、ノックしてもよいし、手からボールをノックしてもよい。⁹⁾

これらの規則からプレーヤーが互いに冷静に激しくハッキングしているのが見えてくる。事実ハッキングの語は不快さを連想させるので、当時のハッキングについての見解に同情するのは難しい。しかし、1892年に、1860年ごろの自己の若い時代にプレーされたゲームについて記述したギルマード (A.G.Guillemard) によるとハッキングオーバーは見かけ程危険ではなく、実際にトリッピングの一形態であった。⁹⁾

ハッキングオーバーは多年に渡りラグビー校において広く用いられたようであり、事実、プレーヤーがボールを持って走っている時、「脛を蹴れ」の叫びがあった。¹⁰⁾

一方、スクラメージにおいてなされたハッキングはギルマードさえ認めるように時には残忍であった。そのハッキングの目的のためにナビーズとして知られる特別のブーツを着用したが1923年コーンヒル誌 (The Cornhill) においてラグビー校の卒業生がそのブーツは底がぶ厚くその外形はつま先が甲鉄艦の衝角に極めて似ていたと記述している。現在のスクラメージのようにかがみ込んだ姿勢をとらずに多数のプレーヤーが直立して立った状態で群をなしたスクラメージの巨大さのために、スクラメージからボールを出す唯一可能な方法は精力旺盛なフットワーク、つまりハッキングであった。このことは The Fifth Form at St.Dominics (1881) の中でのフットボールの試合の記述から明らかであり、弟のブルークがボールをスクラメージから猛烈に押しやったところの Tom Brown's Schooldays から又、推測されるかもしれない。ギルマードによって引用された出来事はその問題をさらに明らかにする。ハッキングに強く反対したラグビー校の教師でありその当時ロンドンの司教であったテンプル (Frederick

Temple) がある時、必要のない荒っぽさでビッグサイドのスクラメージを押し分けて行っている極めて恐れられているハッキングの名手に気付きどのようにしてナビーズを脱がせたかについて述べている。¹¹⁾

これらのハッキングがラグビー校のゲームの特徴であったのは明らかである。この時のウールウィッチアカデミィ (Woolwich Academy) は荒っぽいフォワードに誇りを持っていた。ある時、ウールウィッチアカデミィのハッキングの名手がスクラメージから現われて相手の脚をむき出しにしているハーフを蹴っているのが見られた。当然のことながら、一方の側がハッキングを行ったというのでは必ずしもなかった。ハッキングの名手とハッキングの名手が相まみえる時、その時に生起する事態はこの上なく想像に任せられる。ギルマードによると「スクラメージが解かれたあとも2名のプレーヤーが互いに相手の脛を蹴りあっているのが見られた」のは希有ではなかった。¹²⁾

このハッキングに比べて、ボールを持って走ることに対する反対は純粋に観念的問題であると考えられる。しかもボールを持って走ることがラグビー校のフットボールと他のフットボールの相違を実際に特徴づけたことであった。とりわけ妥協の試みが失敗したのはこのことであった。ラグビー校のゲームを行うプレーヤーは事実、1871年にハッキングやハッキングオーバーを放棄したが、彼等のゲームの本質的な特徴を失うことのないハンドリングを放棄することはできなかった。

他方で、パブリックスクールや大学の外で同じ性質の状況が展開していた。パブリックスクールの教育を受けた中産階級の若い職業人の数が多大になった。そのような人はフットボールは肉屋の俵に適したゲームであると言ったシュリューズベリー校の校長の意見を全部が全部受けているとは限らなかった。スポーツへの関心がこの新しいタイプの特徴の1つになり、成人が自己の余暇の多くを同じ趣味を持った他の

人々とフットボールのゲームに費すのはまったく自然になったようであり、決して不名誉なことではなかったようである。そこからクラブの要求が生じたが、そこでフットボールのゲームを行ったことのある者が彼等の関心事を行うために集まった。これがビクトリア朝の特徴的な現象である。すでにクリケットのクラブがいくつか存在した。——そのいくつかは18世紀に設立されていた。——しかし、ビクトリア女王の治世の初めに数多くのゲームやスポーツにクラブを設立する考えの広がりを見た。

最も古いフットボールのクラブは1850年で始まる10年に遡るが、それは本質的に中産階級の団体であった。特定の学校の卒業生によって設立されたクラブもあるし、ドリブリングとハンドリングの2つの主要な類のフットボールのいずれかに関心を持ったある領域の若い人々のグループによって設立されたクラブもあった。最初は、より多くのクラブはラグビー校の競技様式よりドリブリングのゲームを行った。シェフィールドが1855年に設立され、フォレスト、ハラムがそれぞれ1857年に設立された。これらのうち、シェフィールドがその後の発展に際立った重要な役割を果たすよう運命づけられた。他の初期のドリブリングゲームのクラブにはクリスタルパレス (1861)、ノッティンガムカウンティ (1862)、バーンズ (1863)、シビルサービス (1863)、そしてストークシティ (1867) などがあった。

1863年以前にラグビー校の競技規則に従って競技していたクラブは3つしか存在しなかった。その最古のものはブラックヒースクラブであるが、それはブラックヒース校とラグビー校それぞれの卒業生が一緒になって1858年に設立された。続いて1861年にリッチモンド、1866年にハールクィーンズが設立された。

クラブの多くは、例えば彼等の仕事又は出身校のグループによってスタートしたが、その発端を熱心な者による新聞への広告に求めたクラブもあった。例として1864年3月7日のリーズ

マーキュリー紙に掲載されたものをあげることができる。

フットボール——フットボールクラブの会員を募集します。週2ないし3回。午前7時より8時。於ウッドハウスムーア。

申し込み先はマーキュリー紙事務局, K. 99. 137

この結果、極めて励みになる反響を呼び、リーズアスレチッククラブの設立につながった。このクラブは表面上ラグビー校のゲームを行ったが、相当の局所的な差があったようである。例えばボールを持って走ることは許されなかったが、フェアキャッチは許された。ゴールにはクロスバーがなかった。ボールは直径14インチもあることが時々あった。リーズアスレチッククラブが1865年マンチェスターとのチャレンジマッチのためにハダースフィールドに遠征した時にゴールポストを持参したことが記録されている。

学校と同様に諸々のクラブにおいてもローカルの規則や規則の解釈があった。ドリブリングの競技様式を支持するクラブもあったし、リーズアスレチッククラブのようにラグビー校のフットボールと思われるものを行っていたクラブもあったが、その2つのグループの間には統一性がほとんどなかった。ブラックヒースクラブは1858年の設立時にラグビー校の競技様式に固執したにもかかわらずラグビー校の長いゴールを用いずに短いフラグポストを用い、フルバックの後方にゴールポストを置いた。イングランド北部の歴史あるクラブの1つであるシェフィールドクラブは多分にイートン校の卒業生の影響を受けルージュとして知られるゴールをする方法を普及させるよう試したが、その考えは採り入れられなかった。その後すぐにシェフィールドクラブは近隣の諸々のクラブから成るシェフィールド独自のアソシエーションを設立し、その独自の競技規則を採り入れ、1877年までこのアソシエーションを維持した。

競技規則の局所的な差はその状況におけるもう1つの当然の展開であった。それはスコット

ランドのパブリックスクールそしてケンブリッジ大学において同じところに生じた。競技規則について同意が得られない場合、通常なされるのは双方の側のキャプテンが試合前に問題となっている競技規則について話し合うことであった。一般的にホームチームの競技規則が採られるかもしくは妥協がなされた。グレアム (R.H. Graham) によって引用された書簡文はそのような交渉がどのようにして、時々郵便で進められたかを示している。1867年サレー州の事務局が試合日程についての書簡をケンブリッジ大学に郵送した時、彼が受けた回答は次のとおりである。

ケンブリッジ
グリーン・ストリート25

拝啓

貴殿の大学対サレー州代表の試合の提案であります、若干変更することで引き受けたく存じます。私どもは1チーム15名以下での競技は望みません。1チーム13名以下では競技が可能ではありません。また私どもは私どもの競技規則での競技を望んでおりますが、大学とアソシエーションとの競技規則には共通点が多くあります。従って後者の競技規則での競技が極めて都合がよろしかろうと申し添えておきます。

敬具

事務局

トロッター¹⁴⁾

ケンブリッジ大学の事務局の提案が受け入れられたか又はサレー州が同じような姿勢で回答したかについては明らかでない。

これらの状況において競技規則のより一般的な成文化の必要性が感じられ始めたのは自然であった。

1863年10月26日、ロンドン近郊の11のクラブや学校の代表が、ケンブリッジ大学において同じ目的のための会合が催されたのを知らずに、フリーメイソンズタバーンに集まり、競技規則

の成文化に取り組んだ。そのメンバーは、ノーネームズキルバーン、バーンズ、ウォーオフィス、クルセーダーズ、フォレスト（レイトンストーン）、パーシバルハウス（ブラックヒース）、クリスタルパレス、ブラックヒース、ケンシングトンスクール、サービトンそしてブラックヒースプロプリエトリースクールであった。それらのうちドリブリングゲームを行うものもあれば、ラグビー校のゲームを行うものもあった。最初の決定は容易であった。この会合に代表を出したクラブがフットボールアソシエーションと称する協会を形成するとのもーレイ（E.C. Morley）による提案が承認された。

しかし議論がゲームの諸々の原則について進行するとすぐに問題が続出した。何度か会合が催され、そのいくつかは激しい論争があった。最終的にある程度の譲歩と妥協がなされ、1863年11月24日の第4回目の会合においてドラフトルールが提出された。その競技規則を精査してみると、それはラグビー派が勝利を収めている性格が強かったが、その派の中でもブラックヒースのグループが有力であったことを示唆している。例えば次のことに気付く。

第9条 プレーヤーはフェアキャッチをするかもしくはファーストバウンドでボールをキャッチすれば相手ゴールに向かってボールを持って走ってよいが、フェアキャッチの場合、マークしたなら走ってはならない。

第10条 プレーヤーが相手ゴールに向かってボールを持って走るならば、相手側のいずれのプレーヤーもそのプレーヤーをチャージ、抱きかかえる、つまずかせる、脛を蹴ってよい、もしくはボールをもぎとってよい。しかし、プレーヤーは何びとたりとも抱きかかえることと脛を蹴ることを同時にしてはならない。¹⁵⁾

これは純然たるラグビー校のフットボールであり、チャーターハウス校や他のドリブリング

のゲームの学校の影響を受けたクラブに認められるものではなかった。この第4日目の会合に先立ってケンブリッジユニバーシティルールが新聞で発表され、ドラフトルールの第9条と第10条の2項目についてケンブリッジユニバーシティルール式にこの2項目を削除する側と第9条、第10条を規定する側との大論争が行われた。

1863年12月1日の第5回目の会合において活発な議論がなされた。アソシエーションの事務局長であるバーンズクラブのモーレイは「ハッキングを残したならば大人の誰一人としてそのゲームを続けて行わないだろうし、そのゲームは生徒だけにゆだねられるだろう」¹⁶⁾と主張した。それに答えてブラックヒースのキャンベル（F.W.Campbell）は「ハッキングはフットボールの真髄であります。ハッキングが禁止されたら、ゲームの胆力、決断力が失われてしまいます。」¹⁷⁾と表明した。激情をともなった討論が長時間に渡って続けられたが妥協が得られず遂に出席者の各委員によって投票がなされた。その結果、13対4の大差をもって、2ヶ条の削除が決定した。12月8日の第6回目の会合においてブラックヒースクラブのキャンベルは採択された競技規則は「まったくフットボールを破壊し、あらゆる興味を喪失せしめ、この競技規則が存在する限りベースボールとフットボールとの間の差別観になる」¹⁸⁾として、ブラックヒースクラブはフットボールアソシエーションから脱会すると宣言した。

フットボールアソシエーションによって採択された競技規則が当時のスポーツ紙であるベルズライフ紙に公表されたが、次の2カ条が決定的であった。

第9条 プレーヤーは何びとたりともボールを持って走ってはならない。

第10条 トリッピングやハッキングは許されない。プレーヤーは何びとたりとも手を用いて相手を抱きかかえたり押してはならない。¹⁹⁾

これら自体がラグビー校のゲームの直接の否定であり、それらをもってアソシエーションのゲームが真に誕生したが、その日付は1863年12月8日であった。

しかしフットボールアソシエーション自体は最初は力がなく小さな組織であった。見解の相違が脱会や加盟拒否につながり、かつてはその会員はバーンズ、シビルサービス、クリスタルパレス、ケンシングストンスクール、ロンドンスコティッシュ（ライフルズ）、ノーネイズキルバーン、ロイヤルエンジニア（チャタム）、シェフィールド、ワンダラス、ウォラビイハウス（バットィーズ）の10のメンバーしかなかった。パブリックスクールがまったく含まれていなかったが、この理由は別の見解の相違であった。問題のポイントはオフサイドの規則であった。イートン校、ハーロー校として彼等を支持する学校はラグビー校のゲームが残していたようにボールの前方にあるプレーヤーはすべてオフサイドであるという厳格なオフサイドの規則を支持した。チャーターハウス校やウエストミンスター校は前方へのパスを唱えた。しかしイートン校やハーロー校のいくらか超然とした態度に反して、チャーターハウス校やウエストミンスター校の影響が優位を占め、ようやく1867年までに解決を見た。

フットボールアソシエーションがその競技規則について一致に達すると1867年、有名なフットボールのクラブにフットボールアソシエーション加盟を求める通知が出された。グレアムによって記録されているように諸々の学校のうらのいくつかの態度は極めて啓発的である。彼等の見解がとり入れられたウエストミンスター校やチャーターハウス校は当然のことながらフットボールアソシエーションに加盟した。イートン校はアソシエーションの考えに賛成しながらも新しい競技規則は「緩慢で単純すぎる。」²⁰⁾とし、そしてイートニアン²¹⁾が行うゲームは「より合理性と公正な行為を要求する。」²²⁾もので、

これがアソシエーションに加盟しない理由であると回答した。ラドレーカレッジは、イートン校、ハーロー校、そしてラグビー校が彼等独自の競技規則を放棄すれば、残りの学校の間で同意が得られるのは問題ないとの示唆をした。ラグビー校は、イートン校が独自の競技規則を放棄しなかったように、放棄の意向を示さなかったのは言うまでもなかった。アッピングム校は彼自身が競技規則の成文化の先駆者でありその校長であったスリングは新しい競技規則を認めた。マールバラ校の態度は記録されていない。しかし1867年のルウトレッジ（Routledge）のHandbook of Footballはラグビー校の競技規則やアソシエーションの新しい競技規則に加えてA Simplification of the Rugby Game as played at Marlboroughなる表題の競技規則をプリントした。その編集者はマールバラ校の卒業生であり、ラグビー校に加えてマールバラ校を含めたことはマールバラ校は独自の競技規則で際立っていたことを示唆している。ミドルセックスとサレーセント連合の最初の州対抗の試合が1867年9月、フットボールアソシエーションによって広告されたが、極めて注目を集めた。その試合は1867年11月2日、バタースパークで行われ、引き分けて終了した。1868年1月におけるフットボールアソシエーションに加盟しているクラブの数は30であった。これによりフットボールアソシエーションの基礎は充分固った。

ハッキングについての論争は如何なる方法によっても解決をみなかった。ラグビー校のフットボールのゲームを行っているプレーヤーの数多くがハッキングを野蛮と見るようになっていたに違いない。1870年までにハッキングは上げの問題になってしまい紙上で相当激しく論議された。それはタイム紙（The Times）のコラムから始まったのであるが、ある軍医がラグビー校でのハッキングによる容易ならぬ事故にふれて記述した。²³⁾

ラグビー校のゲームの擁護者は当然のことな

がらその主張を否定した。しかし、ハッキングについての論争をとりあげた通信記者や新聞もあった。ハッキングを野蛮で非人間的と非難し、全面的廃止でなくとも即時の修正を求めた。とりわけ、パンチ紙（Punch）が極めて厳しい批評をもってハッキング論争に加わり、最終的にそのゲームを廃止するよう議会を動かすべきだとの示唆に至った。

その非難には多分に真実があったであろう。50年後、1922年のコーンヒル誌（Cornhill）の中でこの時期のことについてラグビー校の卒業生が次のように述べている。

そのようなプレー人数、スクラメージの遅延、無差別なるハッキングをもってしては、極めて多くの事故が生じた。それらのことは当然のことと看做された。――腕、脚、鎖骨、膝そして足首が常に傷つき、脱臼又は骨折があった。よく知る少年の悲惨な事例を思い出すが、彼はスクラメージの下になって背骨を折った。²⁴⁾

ラグビー校のフットボールはいずれにせよハッキング論争において敗北し、その代弁者によって何がしかの行動を要求されたのは明らかである。

1871年1月26日、チェアリングクロスボールモールレストランにおいて会合が催された。ロンドンの主要なクラブの代表者が出席した。この時、ブラックヒースとリッチモンドのクラブのリーダーシップのもと21のクラブが出席したが他のクラブは、ガイズホスピタル、ウェリントンカレッジ、ハールクイーンズ、キングスカレッジ、セントポールズ、シビルサービス、マールバラノーマッズ、クイーンズハウス、ウェストケント、ウインブルドンホーネッツ、ジブシーズ、クラブハムローバーズ、フラミンゴズ、ロー、ローザンヌ、アデイソン、モヒカンズ、そしてベルサイズパークのクラブであった。この会合の結果、ラグビーユニオンとして知られる組織化された団体の設立となった。

ラグビーユニオンのとった最初の行動の1つはハッキングとトリッピングの廃止であった。ゲームの残りはその本来の形態を実質的に残した。その際立った特徴はプレーヤーはボールをキャッチしてボールを持って走ったり、味方にボールをパスしてよいということであった。現在、ラグビーフットボールの特徴の1つとして広く知られているスクラメージは、その時決してラグビーのゲーム特有のものではなかった。不規則なプレーが数世紀の間、一般的に認められたフットボールの特徴であり、ドリブリングのゲームにおいても急速には廃止されなかった。しかし、ラグビーフットボールにおいては、プレーは発展してゲームの必要不可欠な要素になった。アソシエーションフットボールのスクラメージは単なるとっ組み合いにしか過ぎなくなり、長年かかって消滅した。1877年、イートン校から借用したブリーの語はアソシエーションフットボールの専門用語において、数名のプレーヤーが密集しボールを互いに蹴り続ける混雑したプレーであると定められている。²⁵⁾

ラグビーユニオンが設立されて数年間、ハッキングを廃止した結果、以前よりもスクラメージがラグビーのゲームを支配することになった。かつてはスクラメージが解かれるには、2、3のハッキングの名手の存在が効果的であった。しかし、ハッキングの脅威が取り除かれるとすぐにスクラメージで数多くのプレーヤーが合体し、スクラメージの中にボールを数分もの間隠し、そこにとどめることになった。そのようにしてシャビングエイジ²⁶⁾（shoving age）が始まった。身体が大きく重量あるフォワードが主流となり、事実、プレーの持続時間を時計で計測することによってゲームの真価が判断された。1888 - 9年、ラグビーユニオンの会長であったバッド（Arthur Budd）は「かつて観衆がうまくバランスのとれたスクラメージを大声で声援しているのをしばしば耳にした。²⁷⁾」と述べている。そのようなスクラメージは現代のスクラメージとは極めて異っていたに違いない。

い。というのはその中でもとりわけ、プレーヤーは頭をあげてスクラメージに入った。スクラメージにおいて頭を下げる行為は重大な反則と看做された。1875年のFootball Annualはその時までには増大したスクラメージに頭を下げて入る行為に反対する助言を公式に行った。

スクラメージに頭を下げて入り、ボールをよりよく見るようにしているプレーヤーもいるが、頭を下げているプレーヤーが2名分のスペースを取り、スクラメージ自体がばらばらになるので、それは勧められるべきことではない。スクラメージはすべてのプレーヤーが身体と脚を密着させ自分の前方のプレーヤーをしっかりと押しつけてできるだけコンパクトに形成すべきである。そのようにして相手の重量に耐えるようにしっかりとバックされた集合体を形成するのである。……²⁸⁾

バッドによると「ボールをスクラメージからヒールアウトするのは不当で不名誉」と看做されたので、オープンプレーがほとんどなく、バックスはスクラメージ後方から味方フォワードを激励するのに多くの時間を費やした。ゲーム全体の状況はほとんど少数を除いて進取性、知性、そしてスキルの余地がほとんどなく、そのゲームは一般的に社会のより知的なメンバーによって行われたので、やがて現在のオープンプレーの競技様式の方に発展し始めたのは驚くべきことではなかった。オープンプレーは1870年代にプレーヤーの人数を減らすことによってある程度可能になったが、最初は初期のゲームの実質的に無制限な人数から20名へと、そして20名から現在の15名へと減少した。

しかしながら長時間に及ぶスクラメージにもかかわらずボールがスクラメージから出ることが時々あった。その時フォワードには現在では普通になっているオープンフィールドでの展開の機会が生じた。この場合、フォワードはスリークォーターに支援されたが、しかしながら当

時はまだスリークォーターは主たる突破力とは見られていなかった。例えば1871年のイングランドのトウエンティーズのようにスリークォーターが1名だけでプレーしたチームもあった。しかし、その場合、旧式のゲームの夥しいゴールキーパーの残存的遺物であるフルバックが3名いた。

ハッキングオーバーの廃止により、ボールを持っているプレーヤーを阻止する新たな方法を考える必要が生じた。1846年のラグビー校の競技規則以来、プレーヤーを抱きかかえるのは合法的になったがプレーヤーを抱きかかえるのは一般的に、プレーヤーの手を掴めることを意味した。(そして、1846年の競技規則では片手だけしか掴めないことを特にうたっていた。)これが今では唯一の防御形態になり、それを効果的にするには、相手プレーヤーを掴んだり、抱きかかえる果敢な方法が不可欠であった。これが現代のタックルが存在するようになった方法であった。しかし、あまり危険がなく尽力が経済的な低いタックルの考えは最初は考えられなかった。

新しく形成されたゲームにさえまだ反対者がいた。ハッキングを廃止することによってゲームが軟弱になったと考える多くのプレーヤーが存在し、彼等は機会があればハッキングを非公式に復活させるのを望んだ。1870年に入り、各々の試合の終了時に「ハレルヤ」として知られる華々しいハッキングを5分間行って古き良き時代を祝ったクラブがあると言われている。²⁹⁾

1871年3月21日に行われたイングランドとスコットランドの最初の国際試合はもちろんのこと新しい競技規則に則して行われた。プレーヤーたちはゲーム中にレフリーにハッキングの要求をしたが、その要求は拒否された。レフリーであったロレット校のアマンドはハッキングを行ったら退場させると脅したので、その試合はハッキングがなく進行した。³⁰⁾

しかし、国際級のプレーヤーがこのように感じたという事実はハッキングを支持する伝統が

いかに強かったかを示している。

他方では、大衆の多くがラグビーのフットボールのゲームを乱暴で危険と看做す傾向にあった。バッドは1892年に次のように述べている。

今日、科学の進歩により、原始的なゲームの粗野さが除去され、それに伴う危険性が最少になったという事実にもかかわらずフットボールの恐怖はいまだにジャーナリズムや記者のお気に入りのテーマであり続けている。³¹⁾

アマンドは同じころ、新聞はフットボールの事故の報告に専念していると不満を述べ、さらに続けて5万人のフットボールの選手のうち1名しか死亡してないこと、そして74名中1名しか負傷してないことを証明した。³²⁾

最初是他よりも注目を引いたラグビー校の競技様式は、極めて親しみがなく恐怖で見られていた。これが1870年代そして1880年代の新聞で掲載された見解であった。例えば、1871年に行われたランカシャーとザ・ワールドとして知られるチームの試合についての報告がある。

双方の側が、みずからが優れていることを証明するため、そして存在がその成功にかかっているという精神で戦い続けた。ここで、相対する2名の間に激しい衝突がある。そして、いずれかの側が災難に出くわすのは確実である。関節のすべてが抜けてしまう程、そのショックが大きいので電気技師のどんなサービスをも要しないのは確かである。ここにクラブ専用のぴっちりとしたジャージーを着用せず、ウールの又はその1部がウールのシャツを着たプレーヤーがいた。というのは相手がすぐに首尾よく手をかける場所を見つけ出したからである。

そしてゲームも終了前、その紳士にはシャツが半分しかなかった。別のもう1人のプレーヤーが歯茎から抜けたばかりの前歯を見せて、「そりゃ強烈だった。」と叫んだ。彼は明らかに衝突を経験したのである。³³⁾

最後に1880年ごろシェフィールドで行われた最初のラグビーフットボールの試合についての記事がある。この場合のフットボールはその年シェフィールドの諸々のクラブがフットボールアソシエーションに加盟した1877年までシェフィールドアソシエーションの支配下にあった。報告はそうにはっきりとした偏見で始まる。その偏見を隠すための批判的方法はほとんど役に立たない。彼の態度は時と場所に典型的であったに違いない。彼の目を通して見ればゲームは極めて貧弱であることを認めなければならない。彼はシェフィールドアソシエーションとフットボールアソシエーションの競技規則は不当なプレーを防止するのに効果的であったと主張している。

しかしながら土曜日にプレーされた競技規則では重量があって乱暴な側が必然的に有利であるようにこれへの際立った対比が示される。ほとんどスキルがなく、必要とされるのはドロップキックとボールを持って相手をかわし確実にタッチダウンする能力である。これら競技規則の特異性はプレーヤーはボールを拾いあげボールを持って走り、ボールを前方にノックし、ボールを蹴り、もしくはタックルを受けそうになったら別のもう1人のプレーヤーにボールを投げるのが可能であるので、反則を犯すことがほとんど不可能なことである。しかしながら、プレーヤーがボールを持っている場合、相手はそのプレーヤーの首、脚もしくは手の届く範囲のいかなる衣類の部位をも掴んでよい。次に別のプレーヤーが来て、そのプレーヤーがボールを置けと叫ばなければ、場合によっては彼は転倒させられ、ころがされるかする。故意のハッキング、換言すると相手がボールを持って走っている時膝を蹴ることの若干の事例のために、我々観衆はアソシエーションよりもラグビーの競技規則が優れているとは確信できなかった。ラグビーのゲームには、格言

にもあるように事故に平然としている生徒にまったく適している。しかし、成人はよりスキルのあり、あまり乱暴のないゲームを好むであろうと考えるべきであった。上述の見解は偏見をいだかせるようであり、一流のチームの2つが戦っているのが見られたら改められるかもしれない。しかし、土曜日、観衆によってラグビーの競技規則を支持しない見解が形成されたのは確実である。……競技は昔のようにとっ組み合い、首絞め、片腕にボールを持って走り、何も持っていない手で相手の顔を打つこと、マンチェスターによる素晴らしいドロップキック、自己に有利に形勢を一転させようとするがキックによる胆力はあるがまったくの無駄な試みから成るが…、競技について詳細に説明するのは不可能である。³⁴⁾

これらの記事からこの時代に行われていたラグビーのゲームは理論とはかなり異っていたことがよくあったことが判断されるかもしれない。理論と実際の差はすべてのゲームである程度まで生ずる。しかしながら、ラグビーもしくはアソシエーションのゲームの初期の時代に公式の競技規則が定められたようなゲームの理論と様々な地方の数多くのクラブの実際の間に極めて大きな不一致があった。統治団体の自己訓練を試みて多年を費やして進歩はゆっくりとしたものであった。当時の論争について知ると個々のフットボールのプレーヤーやクラブの態度そしてそれ以上に紳士のプレーヤーでさえスポーツ精神と考えられる競技規則に従い反対の決定を疑義なく受け入れる意志に比較的欠けていたことに驚かされる。フットボールのゲームにおける不一致については数世紀の間、双方のチームのキャプテン、もしくはプレーヤー間の話し合いによって解決するのが慣例であった。1581年にマルカスター（Richard Mulcaster）はアンパイア又はレフリーを置くのが望ましいと示唆した³⁵⁾が、アンパイアとレフリーはまっ

たく存在しなかった。

パブリックスクールの間で行われた最初の試合においてそれが行われると必ず不快さが残った。クリフトン校とマールバラ校が初めて対戦した時、悪感情、立腹そして乱暴なプレーがあった。このような2、3の試みのあとイングランドの校長が学校間の対抗試合を許さなかったのも不自然ではなかった。しかしながら他の問題のようにこの場合もロレット校のアマンドは先駆者であった。彼の影響のもとに学校間の対抗試合はそれがイングランドでそうなる以前にスコットランドにおいて規則的に行われていた。アマンドは1872年、学校間の対抗試合は必ず敵意をうみ出すに違いないという考えを嘲笑し、イングランドの仲間に再度、学校間の対抗試合を試みよう勧めている。彼が誇りを持って語るスコットランドにおける学校間の対抗試合は、

通常、最高の公正さを持って、快活そしてスポーツマン的精神を持って行われる。……フェテス校とロレット校の両サイドが黙して傍観し、一方、両サイドのキャプテンとレフリーが勝敗のかかっている問題のゴールについて論議しているのを見たことがあります。³⁶⁾

ゲームに秩序を持ち込むことについての第1歩は1581年のマルカスターの勧めに従ってレフリーもしくはアンパイアを置くという原則の採用であった。これは又、パブリックスクールにおいても始まった。1862年、マールバラ校においてはハウスマッチに³⁷⁾においてはアンパイアを2名置き、双方のキャプテンが各々1名のアンパイアを指命することが確立された慣例であった。³⁸⁾

しかし、それよりはやくアンパイアを置くことが試みられていたに違いない。というのは1870年までにはその考えはもはや新しくはなかったからである。1871年、F.A. カップコンペティションが開始された時、競技規則ではアンパ

イア2名とレフリーの1名がいなければならぬことが定められていた。そして1875年、ラグビーユニオンは望むならば試合においてアンパイアを置くことができると告げた。ラグビー、アソシエーションの両ゲームとも2名のアンパイアが残ったが現在ではタッチジャッジとして知られている。

そのようなオフィシャルが出現したにもかかわらず、自動的に規律がうまれることはなかった。というのは当時、盲目的忠誠が高まっていたからである。1878年から1892年までラグビーユニオンの会長にあったギルマードは、「アンパイアはその決定に異が唱えられるので、決して愉快的な時を過ごせることはなかった。³⁹⁾」

と述べている。その20年後でさえ、ローランドヒル (G.Rowland Hill) によると、

ゲームが終了したあとレフリーが被る不平不満はあらゆるクラスのプレーヤーがかかると一種の病気であるのは残念である。⁴⁰⁾

レフリーに対する批判はアソシエーションフットボールが振り払うことのできなかった病気であった。ラグビーのゲームでさえ強い自製の伝統があるにもかかわらずこれを免れなかった。それより悪いのは初期の時代のアンパイアはどちらかいずれかの側の味方をしたので信頼に値しないことがしばしばあった。そしてレフリーの注意がアンパイアの監視に向くので、ゲームから注意がそれたり、多くの場合、アンパイアの不正、不適のため、アンパイアがレフリーにとって重大な障害となった。しかし、ラグビーユニオンの委員会はこれらの欠点に気付き、それらを克服する方法に極めて思考がそそがれた。反則を犯したプレーヤーをペナルティとする考えは、最初1880年に議題にあがったが、プレーヤー側からの強い反抗にあった。しかし、レフリーにある程度の懲戒的な権限を与えることが望ましいことが明らかになったので、ペナルティへの案が1888-9年に採り入れられたばかりでなく、レフリーは乱暴したプレーヤーの退場を命じたり、レフリーの決定に異を唱

えた者をユニオンに報告する権限が与えられた。ユニオンに報告することでさえ充分でなかったのにさらにレフリーに異を唱えたプレーヤーに退場を命じる権限を与えた。

結

それまで学校やクラブごとに独自の競技規則で行われていたフットボールのゲームがそれぞれ固有の伝統形式に拘束されて相互の交流や対戦を妨げていた実情を鑑みて、フットボールのゲームの統一化された競技規則の成文化の気運が高まり、1863年10月26日、ロンドン近郊の学校やクラブの代表がロンドンのフリーメイソンズタバーンに集まりフットボールアソシエーションを設立した。何度か会合が催され論議が進むにつれ問題が生じた。中心課題で激しい論争が生じたのは特にハッキング（相手プレーヤーの向こう脛を蹴ること）とボールを持って走ることであった。12月1日の第5回目の会合にむいてそれについて活発的な論議がなされ、ハッキングとボールを持って走ることの禁止が決定され、事実、ブラックヒースクラブを代表とするラグビー支持派が敗れた。これにより、ブラックヒースクラブはフットボールアソシエーションから脱会した。

いずれにせよラグビーのフットボールの支持派はハッキング論争において敗れ、何がしかの行動が要求されたが、1871年1月26日、ブラックヒースとリッチモンドのクラブのリーダーシップのもと21のクラブがボールモールレストランに集まり、ラグビーフットボール、ユニオンが設立された。

この時、ラグビーフットボールユニオンがとった最初の行動の1つは、ハッキングとトリッピングの廃止であった。ラグビーフットボールのゲームの特徴の1つであるボールを持って走めることは残した。

註及び引用・参考文献

- 1) Rugbeian. ラグビー校の卒業生もしくは生徒
- 2) O.L.Owen, The History of the Rugby Football Union, Playfair Books, 1955, p. 332.
- 3) runuing in. ゴール内に運行すること。
- 4) 1864年にマールバラ校とクリフトン校の間で対抗試合が行われている。
- 5) R.J.Phillips, The Story of Scottish Rugby, Edinburgh, 1925, pp. 1 - 2, quoted in Magoun, History of Football from the Beginning to 1871, 1938, p. 87.
- 6) H.H.Almond, Rugby Football in the Scottish Schools, in Marshall, (ed.), Football in the Rugby Union Game, 1892, pp. 51 - 66, quoted in Marples, A History of Football, 1954, p. 139.
- 7) Alexander Hag Tod, Charterhouse, 1905, p. 155.
- 8) O.L.Owen, ibid., pp. 332 - 333.
- 9) Anon, Football as played at Rugby in the 'Sixties', Cornhill, 1923, pp. 571 - 581, quoted in Jennifer Macroy, Running with the ball, Collins Willow, p. 115.
- 10) Jennifer Macroy, ibid., p. 133.
- 11) U.A.Titley, Century History of the Rugby Football Union, 1970, p. 69.
- 12) Marples, ibid., pp. 144 - 145.
- 13) Marples, ibid., pp. 146.
- 14) R.G.Graham, The Early History of the Football Association, The Badminton Magazine, No. XLII, vol. VIII, 1899, p. 76.
- 15) N.L.Jackson, Association Football, George Newnes, 1899, p. 33.
- 16) The History of the Football Association, 1953, p. 29.
- 17) The History of the Football Association, 1953, p. 29.
- 18) The History of the Football Association, 1953, p. 29.
- 19) N.L.Jackson, ibid., p. 38.
- 20) R.G.Graham, ibid., p. 81.
- 21) Itonian. イートン校の卒業生もしくは生徒
- 22) R.G.Graham, ibid., p. 81.
- 23) O.L.Owen, ibid., p. 60.
- 24) Anon, ibid., pp. 571 - 581, quoted in Marples, ibid., p. 153.
- 25) Earl of Scffork, Encyclopaedia of Sport, 1897, p. 428.
- 26) shoving age. スクラメージにボールをとどめて、長時間かけてひたすらスクラメージを押すといった戦術を用いた時代。
- 27) Marples, ibid., p. 155.
- 28) Marples, ibid., p. 155.
- 29) C.T.B.Marriot, The Rugby Game and How to play it, London, 1922, p. 15, quoted in Marples, ibid., p. 157.
- 30) R.W.Irvin, International Football: Scotland, in F. Marshall, (ed.), Football: The Rugby Union Game, 1892, pp. 33 - 34, quoted in Eric Dunning, Barbarians, Gentlemen & Players, 1979, pp. 124 - 125.
- 31) Marples, ibid., p. 157.
- 32) H.H.Almond, Football as a Moral Agent: Nineteenth Century (Dec. 1893), pp. 899 - 911, quoted in Marples, ibid., p. 157.
- 33) Marples, ibid., p. 158.
- 34) Marples, ibid., pp. 159 - 160.
- 35) Richard Mulcuster, Posisions concerning the training up of children, (ed.), 1971, p. 105.
- 36) H.H.Almond, ibid., pp. 51 - 66, quoted in Marples, ibid., p. 161.
- 37) House match. パブリックスクールの寄宿舎の試合。
- 38) The Laws of Rugby Football as played as played at Marlborough College, 1869, quoted in Marples, ibid., p. 161.
- 39) Marples, ibid., p. 162.
- 40) Marples, ibid., p. 162.